



指仙人

試し読み

きかいかいかい

からり、と微かな音がして「ああ、おかえりなさい」と言う男の声が聞こえた。茂吉は声が出たのを不思議に思つてぐるりと見回す。と、長屋の一番奥、惣後架に一番近い長屋の腰高障子の下の辺りが四角く黒く欠けていた。あんな所に穴があつただろうかと茂吉が首を捻つてみると、すすす、と音もなく黒の穴が細くなつていく。よくよく見ると、閉まつていくのは腰高障子だ。

つまり、腰高障子の足元にもう一つ小さな腰高障子があるのだ。

茂吉は幻かと目を擦る。何度も擦る。痛いくらいに擦る。きつと目の周りが赤くなつて、後で母に叱られるだろうくらいに擦りながら、茂吉は考えた。

昨日はあつただろうか？ いや、ついさつきまであつただろうか？

自らの記憶を遡る。だが、覚えがない。

『くしゃくにけんのながや』は隙間風どころか、野分でも来たら長屋ごと吹っ飛びそうに古い。障子のあちこちに穴塞ぎの裏紙が貼つてある。むしろ障子紙が残つてるところが少ないくらいだ。板間の床板もかなり古く今にも踏み抜くのではないかと心配になるほど磨り減つている。あまりの古さのせいか、鼠すらも見かけないほどだ。

以前住んでいた長屋の記憶はあまりないが、それでも腰高障

子にもつと小さな腰高障子があるなんて、見たこともない。

長屋の前の土に棒切れでいたずら書きをしていたのを止めて、茂吉はふらふらと奥の長屋の前まで近付いていく。

「茂吉や、ご飯だよ」

母に長屋からそう呼ばれたので振り返り、うんと頷いてもう一度最前見ていた長屋の腰高障子を見た時には、小さな障子は消えていた。茂吉はごしごし、と目を擦つてみたが、やはりそこには普通の板があるだけだった。

茂吉は自分が見たものが本当だったのか、夢だったのか、ワケが判らなくなつて、その晩熱を出した。

ある晴れた日、茂吉はじつと蟻が行列をなして巣に色々なものを持ち帰っているのを見ていた。蟻は小さな体をしているのに、実に力持ちだ。自分よりも大きな虫や葉っぱを啜えたり、足で引き摺つたりしながら、それでも自分だけの力で持つてくる。地面に落ちていく枯れ葉や、木の枝、雑草は蟻よりも大きい。だけれど、それをものともせず重い荷物を運びながら乗り越えていく。そんな様子は見ていて飽きることがなかった。同じ長屋の『インキョジーサン』が茂吉が木の根にある巣の前にならずと蹲み込んでいるのを不思議そうに覗き込んで、「なんじゃ、蟻か」と呟いて、日向ぼっこへ戻つていった。

この裏長屋は、表店に大家が住み、小さな乾物屋を営んでいる。その脇の木戸から路地を抜けると、井戸を真ん中に左右に

四軒ずつ長屋が並ぶ。一番奥が惣後架とゴミ捨て場。そして、井戸の裏に珍しく一本の大きな木が立っている。その下には床机が置かれていて、昼間はいつも隠居爺さんが日向ぼっこをしている。

「茂吉や、茂吉よう」

母の呼ぶ声がした。茂吉は立ち上がって長屋まで駆けていく。

「やあ、お慶さん」

老爺の前を通り過ぎた時に、その声が掛かった。

「ご隠居さま、いいお天気になりましたね」

母はそう答えて、茂吉の方を見た。

「おつ母ア、これから橋の向こうへ届けものだ。一緒においで」

茂吉はその言葉に、視線を足元に落とした。行きたくない、と言うのが一番の理由だ。茂吉長屋の外を歩くのが苦手だ。むしろ嫌いだ。

外は怖い。人が怖い。

蟻は平気なのに、なぜと言われても怖いものはどうしようもない。

強いて言えば、絶え間なく歩いている人の雑踏が怖ろしい。

突如目の前に登場する数々の足と尻。武士と呼ばれる者たちの尻から突き出す長くて硬い鞘、物売りがぶら下げている籠や桶。野菜や魚の匂い。ゴロゴロと雷のような音を立てて、野分のような勢いで通り過ぎていく大八車。荒い鼻息を吐きながら大荷物を背負って頭を落として進む馬の息遣いと足音。砂埃をこれでもかと巻き上げる空っ風と人の飛ぶような歩み。その全てが怖ろしいのだ。

だから行きたくない。

茂吉は母から目を逸らしたまま、口籠る。腹の中ではこんなにも行きたくない理由を並べ立てていると言うのに。

「茂吉や、おつ母と一緒にダメかエ」

母がしゃがみ込んで、顔を覗き込む。ちらりと見ると、ちよつと悲しそうに、それでも優しい笑みを浮かべていて、茂吉は安堵する。

「そうかエ。けどネ、おつ母はどうしても届けぬワケには行かない用事だ。だが、お前は一人で留守も出来ない年頃。長屋の外に出るのが怖いのはおつ母も承知サネ。だがそれにここへ越してきたのも理由があつてのこと。尚更お前を残しては出かけられぬ」

母の言うことにも一理ある。だから茂吉は余計に困ってしまった。

外に行くと言うだけで、はや足が竦んでいくくらいだ。

だが、母を困らせるのも嫌だ。母は茂吉が物心つく頃からずっと、家で仕立ての仕事をしていた。今は前よりも多くの仕事をしている。その仕事で金を稼がねば、二人ともに生きていくこともできない。商売や世の中のこととはまだ何も判らないけれど、それだけはなぜか判っていた。

だから、母を困らせたくない。

さて、どうしたものか。思案に暮れて茂吉はうんと眉根を寄せた。

母が震える茂吉の手を握って、「さ、おいで」と言い聞かせるように言うが、茂吉はまだ決心すらかない。いやいや、と

首を振って、もう一つうんと足を踏ん張った。

「さあ、茂吉や。いい子だ、歩あゆびなっし」

母の少し苛立ったような声音に、なお嫌だと踏ん張って、言葉にならない呻き声を上げて母の手から逃れようとする。母は離すものかと尚手を握る力を強くした。茂吉と母の攻防が繰り広げられる。

日向ぼっこして居る隠居爺さんはどうしたのかと思えば、ぽかぽか陽気にのんびり昼寝しているらしい。床机に座った姿勢で、こつくりこつくりと舟を漕いでいる。助けの手はない。

茂吉はとにかく母の手から逃れることしか考えられなくなつた。母の手を離そうともがく。背中が弓形になるほどに反つて、腕が肩から抜けてしまいそうだ。母は茂吉、茂吉、と言いつつ聞かせるように呼びかけていたが、もうこうなるとほかの事は考えられない。

あつ、と言う母の驚いた声が出たと思うと、手が自由になつた茂吉はどしん、と尻餅をついた。

「茂吉」

母が再び茂吉の手を掴もうとするのを掻い潜つて、茂吉は長屋の奥へ駆けて行く。けして母が嫌いなのではない。ただ、どうしても外には行けない。ここへ越してきた時もずっと母の胸に抱かれていて、町中を見たこともない。見たいとも思わなかつた。

バタバタと惣後架やゴミ捨て場の方へ走っていくと、折り悪く惣後架の一つから出てきた人物の足へ勢いよくぶつかった。

「おっと」

驚いた声に見上げると男が立っていた。思わず茂吉は慌てて母の方へ走り帰り、後ろに隠れる。怖い物の中でも、大人の男が心底怖いのだ。

「ああ、センセイ」

転寝をしていた老人が、ふと目を覚まして男をそう呼んだ。茂吉は怖々と母の後ろからそう呼ばれた男を見る。鬚ではなくぼさぼさに伸び放題の総髪を後ろで一つにまとめている。無精ひげがまだらに生えていて、眠そうな目を擦りながら、ぱりぱりと肌蹴た腹を搔いていた。

「やあ、爺様。良い天気ですね」

そう老爺に答えた声は、何と言うか、すうと広がってふわっと消えるようだった。茂吉が今までに聞いたことのない調子だ。同時に、過日誰も居ないのに「ああ、おかえりなさい」と長屋の中から聞こえて来た声だとも判った。

途端に、腰高障子の隅つこに、もう一つ小さな腰高障子を見たことも思い出した。

あれを見たのは、どの長屋だっただろう？ 茂吉は母の後ろからじつと長屋を順に見て行く。

「センセイ……？」

母が驚いた様に呟くのが聞こえた。

「ああ、お慶さんは初めて会いなさるか。奇妙奇天烈、奇怪怪々奇々怪々。おかしなことなら何でもござれのキカイセンセイさア」

隠居爺さんが面白そうに笑いながら男を紹介した。

「マア、左様で」

男が困ったように頭を掻きながら笑う。

「イヤね、このセンセイ実は昔天狗に攫われたつてエ御仁なのよ」

うひひひ、と爺さんが潜んでいない潜み声でお慶と茂吉に言う。

「てんぐ」

茂吉は思わずびっくりして呟いた。といつても声は出ないから、ひゅう、しゅう、と溜め息のような音しか出ないが。

「オオ、それぞれ。天狗様の神通力とやらを授かったのサ。だから、おかしなことなら何でもござれ、とマア、こういう次第ヨ」

茂吉の声が聞こえたのではあるまい。だが、口の動きで理解したのでらう。どうだい、と老爺が自慢げに言う。もう既にひそひそと話していたのも忘れ、大きな声だ。

「爺様、全部聞こえてますよ」

センセイ、と呼ばれた男が照れて、でも呆れたように呟くの、老人がこれはしたり、と悪戯が見つかった子供のような顔で己の額をてんと叩いた。

「センセ、もう出るにヨ」

ある長屋の腰高障子がからりと開いて、何やら風呂敷を抱えて切れ長の目をした女が出てくる。それで茂吉は不思議な長屋の場所を思い出した。惣後架に一番近い、奥まった長屋だ。

「ああ、モウ良いのですか？」

「アイ、お蔭で随分と良いヨ。お世話様」

質素な単衣を纏った女が下駄をカタカタ言わせて歩いてくる。茂吉がこの長屋へ来てそう日が経っていないせいか、他の

住人を見るのは初めてだ。

「お、こん、どこぞ悪かったのかエ」

隠居爺さんが女に声を掛ける。

「アア、聞いておくんさいましヨ。店で出す油に当たつちまつてねエ。近頃は随分と酷い油が回つてるもんサ」

「で、なんとかしてほしいつて、すごい形相で夜中に飛び込んで来てね。さっきまで唸るの、吐くの、グチグチと恨み節は零すは、こつちも大方寝不足ですよ」

「アレサ、センセったら憎たらしい。そう女の醜態を話すもんじゃアねエわナ」

センセイがくあ、と一つ大きな欠伸をすると、おこんと呼ばれた女が袖でぶつ真似をして、おっと遅れちまう、と慌ただしく下駄をカタカタと鳴らして長屋を出て行った。

「やれやれ、やつとうるさいのが出て行った」

別の長屋がガタピシと音を立てて開くと、もう一人の女が出てくる。茂吉にはまだ女の美醜と言うものが確とは判らないが、先におこんと呼ばれた女も美しかったが、こちらの女も相当地美しい。知らず、ぼうと見惚れた。

「オヤ、おろくじゃないか。晴れなのに休みとは珍しい」

爺さんはこちらの女にも声を掛ける。おろくと呼ばれた女は具合が悪いのか、少し胸元が肌蹴た格好で入口の柱に青い顔で寄りかかつて、しよぼしよぼと目を瞬かせている。

「なに、昨日お屋敷の前を回つたら珍しく座敷に呼ばれたは良かったが、マアむさくるしい浅黄裏が呑め呑めとしつこくつてねエ。酔い潰して手込めにしようつて魂胆が丸見えサ。だから、

* お願いとおことわり *

本 PDF は試し読みのために作成いたしました。

刊行年の古いものは、当時と現在の製作環境の違いにより、実際の頒布物の見た目と異なる場合がございます。

また、試し読みでは、頒布物の全作品をサンプルにしている場合と、当時の原稿が手元にないなどの事情で、一部作品のみサンプルとしている場合がございますので、あらかじめご了承くださいませ。

なお、有償無償を問わず、本 PDF の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する、あるいは本 PDF を有償にて再配布する行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

作成：寝床屋

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: nedocoya@gmail.com

Twitter: [@nedocoya4pr](https://twitter.com/nedocoya4pr)